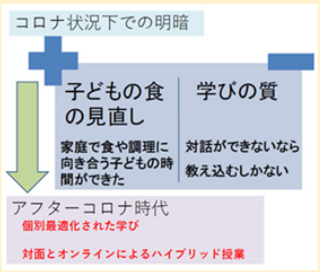
講演内容

コロナ状況下での明暗、子供の未来を支える主体的・対話的に学ぶ食育の実現

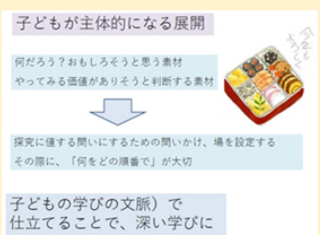


2月15日の第14回の食育セミナーでは、「理解する」とは子供への敬意であること、そして学び手である子供の学びの文脈を大切にすることが主体的・対話的で深い学びにつながるというお話をさせていただきました。
これは、アフターコロナにおいても前提となる考え方にちがいないと考えています。
アフターコロナ時代においては文部科学省が現に進めているように、子供たちがタブレットを持ち、自分の学びを履歴として蓄積し、一人一人に応じた最もよい教育を実現する方向に必ず進むと思います。
また、対面とオンライン、これが融合されたハイブリッドの授業、これもアフターコロナ時代の教育の大きな方向となると考えます。
したがって、今後は体験、気づき、振り返りという学習の過程を大切にしながら、学びの内容を自分事として捉えることができるような学びのデザイン求められます。
また、ハイブリッドの授業を考えるにあたって、体験の質の保障、そうしたものがますます重要になってくると考えています。

子供が問いをもつ教材とはなにか？

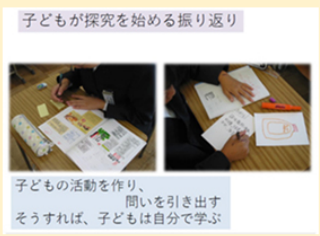
私たちが作成した「食育BOOK」では、ろすのんを取り上げています。
アフターコロナ時代に子供たちが問いをもつ優れた教材と自負しています。
ろすのんの絵解きをすることで子供たちの興味をひき、「なぜ泣いているのか」を探究することで、食品ロスに向き合う深い学びになると考えています。
ろすのんは、子供から問いを引き出す教材としての魅力があります。
また、表示について学ぶ授業では、子供たちの前に2本のお茶のペットボトルを差し出します。1本はそのまま、もう1本はラベルをはがしています。「どちらを買いますか？」と聞くと子供たちはラベルがついている方を買うと言います。
その理由は、「表示がないと原料がわからないから」「緑のイメージがちがう」「何が入っているかわからない」など。面白かった理由としては「メーカーが書いていないと信用できない」と言っている子もいましたが、「最近は、メーカーが書いてあっても信用できない。」という子もおり、食に関する情報を一人一人、濃淡はありますが、拾っていたり、触れていたりして、すでに知っていると言えます。授業の終末に、今日の学習にタイトルをつけてくださいと子供たちに聞きました。
どんな題をつけたと思いますか？「ラベルの必要性を知ろう」「ラベルにはいろいろな情報が」などのタイトルを子供たちはつけてくれました。「ラベルに関心を持ちましょう。」「食品表示を大切ですよ。」そうした事を教師が言わなくても子供たちは受け取り、学びが成立しているのです。
授業でたくさんの事を教えたつもりでも、学びが成立していないこともある、学び手である子供が自分事をして捉えているかどうかにかかっているのです。
授業の感想を読むと「今度お茶を買ったらラベルを気にしてみたいと思う」「他のジュースやお茶のラベルについても安心してもらえる工夫が入っていることを考えてみたいと思います。」などが寄せられていました。一人一人のなかで学びを駆動し、主体的に学ぶ姿を実現できたと私は考えています。

子供が主体的になる瞬間



先ほどの「お茶」の授業でお話したように、子供たちが「なんだろう」と面白そうと思う素材を提示することから始め、「先生がはがした表示ラベルには何が書いてあったのかな。」といった問いかけや、場を設定しすることで子供が主体的になる授業が生まれます。
その際に「何をどの順番で」示すのが重要になります。例えば、「野菜の浮き沈み」を考える授業では、水槽に8分目くらいの水を入れ、切っていない野菜が「浮く」か「沈む」かの実験をします。
話し合って予想し、意見を引き出しあい、実際に確かめ、それを繰り返すことで子供たちはある決まりがあることに目を向け始めます。土の中にできる野菜は沈むのです。ここでは、ピーマンから始めることで子供が実験に入りやすくし、続いてキャベツで浮くか沈むかが分かれることで討論が始まる、そんな風に提示する順序が大切になります。「土の中で育つ野菜は沈み、土の上で育つ野菜は浮く」という答えを見つけ、「他の野菜はどうなのだろうか」「他の野菜はどこで育つのだろうか」、そうしたことに自然に関心を持ち、問いを連続させ、子供たちは探究心を深めていきます。
子供の学びの文脈を大切にしながら探究を作りあげることで深い学びに届くのです。一人一人の中に学びの場を作っていくことが今後のアフターコロナ時代でとても大切になります。

子供が探究を始める振り返り、有能性を大切にする



これまでの学校の授業では、教師の問いかけや説明によって、子供たちが学びを始められるように手厚い支援をしてきました。またクラスの仲間と話し合いをすることにより、自分の問いを自覚して学習を始めてきました。これまでは授業の導入にエネルギーを注いできましたが、今後は授業を受けたことから始まる学びを作っていくことが大切だと私は考えています。授業が探究を始める起点になる、そんなイメージです。
そこで、授業設計を見直し、振り返りを十分にとることが必要になります。また、自分事として成立した問いをどのように解決したらいいのか、その方法や道筋を教師が支援することが重要となります。
コロナ禍での密を避ける状況下で対話の形も変わってきました。これまでは、声に出して話し合う、音声言語での対話に関心が行き過ぎていたのではないか、そんな反省を込めて、今後は文字言語での対話がポイントになります。黒板、ノート、ワークシートを足場にする対話、過去の自分と今の自分への振り返りを文字言語を通して対話することも必要にもなります。
これまで、対話的な学びというと「相手」中心でしたが、最終的には自らの考えを広げ、深める、そんな「自分」との対話ができれば、それは対話が成立していると考えることができます。
自分との対話や、文字を通した対話をより充実していくことが今後の課題であり、希望であると思います。子供が生まれながらもっている「学びのメカニズム」が十分に発揮され、身の回りの事物・現象に関する個別的理解を深めていくような学びをいっそう実現することを期待します。子供たちに関わる大人が重要であることは変わりませんが、これまでの教師が手厚い支援をしてきた教育とはちがい、今まで以上に子供たちの視線で、主体的な学びを尊重する教育を作っていく、今はそういったターニングポイントであり、それが実現できるチャンスだと考えています。